

庄川の歴史と共に続いてきた信仰

山田 剛 義

皆さん富山県の七大河川の一つ『庄川』をご存じでしょうか？

庄川は、富山県でも西部地区 呉西と呼ばれる地域を流れる一級河川であり、遠くは岐阜の烏帽子岳（えぼしだけ）を水源とし、世界遺産である白川郷・五箇山に沿う流れとなっており、全長約 115km とも言われている河川です。

庄川の由来は、荘園が発達した頃その地域が『雄神の庄（雄神の荘）』と呼ばれており、雄神の庄に在る川との名残りから、現在の庄川の名称が残ったとも言われています。

今回はそんな庄川の地域信仰を鑑みながら、ご紹介したいと思います。

庄川はその歴史は古く、治水が成されていない昔には水害が度々発生しています。近年では、明治 29 年、昭和 9 年に大水害が起こっており、他にも昭和 11 年、22 年、23 年、27 年、28 年、33 年、36 年に起こっています。

しかし、これはあくまで近年の被害文献としての被害の記録が残っているというだけで、それ以前にも多くの水害が発生していたと思われる記述があります。

多くの農作物や川魚などの水産物が壊滅的な被害に遭う水害。

庄川ではそのような水害が多く発生していた歴史の中で、民話的なお話と共に信仰が生まれていったようです。

そんな歴史を紐解いて、ご紹介していきたいと思います。

庄川雄神（おがみ）信仰の起点、それは庄川の弁財天社（富山県東砺波郡庄川町庄 1211）と呼ばれる神社の掲示より読み解くことが出来そうです。



庄川の弁天社 写真

石碑には、庄川辨財天 元雄神神社 と彫られています。

そしてその歴史として2説掲示されているので、ご紹介したいと思います。



まずは一つ目の碑

『弁財天社略縁起

謹んで庄川総鎮護の御社と称え奉る辨財天社の由来を窺い奉るに第八十六代後堀河天皇の寛喜二年庄川は毎年洪水打ち続きて昨日の美田は今日は川原と荒れ果て万民の嘆き甚だしければ時の大宮司藤井秀範雄神高瀬の神前に祈願なしぬるに満願の七日目の暁に畏しや御託宣ありて市杵島姫命保食神を祭るべき地を川辺に求むべしと諭され御教の随に川辺に至ればあな不思議や一箇の島忽然と河中に峙ち水流和やかに左右に分かたる秀範これこそ願望成就の奇瑞なりとして社殿を造立し毎年幣帛を捧げ安穩にして五穀成就萬民繁栄の祈願怠ることなければ萬民安堵の思いをなせり。

抑も市杵島姫命は水脉を司り給ひ保食神は五穀を守り給ふ神威いや高き神にしあれば老若男女の分ちなく常に信仰し水難を治め萬民の繁栄を祈らば御靈験の著しきは疑なかるべし当年は三十三年毎の式年慶賀の神事に会い参拝の人々に此の尊き御神像を奉拝せしむるものなり。

再拝拍手謹んで拝礼

平成二年八月

藤井家六十八代神主 藤井秀弘謹拝』

そして2つの目の碑



『砺波市指定文化財

庄川の弁財天社

弁財天社は、庄川流域四万農家を庄川の洪水から守る水神として、流域の人々の崇敬を集めている。三三年ごとに行われる「御開扉」には十万人をこす参詣者で賑う。

弁財天の起源については古来諸説が多いが、天正十三年(1585)の大地震で庄川が大洪水になったおり、藩主前田利長が被災地の視察にこの地を訪れたとき、激流逆巻く流れの中に樹木が繁茂した小島が残り、被害を最小限にとどめた。

利長公は不思議に思し召され、記念のため弁財天を祀り、小島を弁財天山と命名したと記されている。

弁財天社は別称「元雄神神社」といい、庄川の洪水で雄神神社が東側山裾に移転を余儀なくされ、残された拝殿に本殿と同じ祭神を勧請した故に名づけたといわれている。

周囲には、近隣に珍しい大株のヤブツバキの群生が見られ、春には濃い緑の中に赤い椿の花が咲き誇っている。

昭和六十二年三月

砺波市教育委員会』

という、2種類の掲示がなされています。

この掲示で共通している事項は、一度は鎌倉時代 後堀河天皇時代（1230年頃在位）、二度目は天正13年(1585年) 前田利長公が藩主だった頃に庄川が氾濫し、荒ぶる川の流れる中にその流れを堰き止める小島が現れた事で水害を最小限に留められたという事項が読み取れます。

そして、時代の古い前者の記述により、当時の高瀬神社の宮司さんが神様のご宣託により川のほとりに市杵島姫命（いちきしまひめ）と保食神（うけもちのかみ）を祀った事が信仰の始まりだったのではないかと伺えます。

市杵島姫命はいわゆる水の神、保食神は人々に五穀を与える神とされており食を与える神様とされており、保食神に関してはおもしろい逸話が残っています。

ある時、天照大神（あまてらすおおみかみ：太陽の神）が保食神の仕事ぶりを月夜見命（つくよみのみこと：夜の神）に見て来るように命じたところ、保食神は、陸に向いて米を吐き出し、海に向いて魚を吐き出し、山に向いて獣を吐き出し、それらの食糧を使い月夜見命をもてなしたと言います。しかし、月夜見命は吐き出したものを食べさせるとは汚らしいと怒り、保食神を斬り捨ててしまったと言います。

それを知った天照大神は怒り、月夜見命とは会いたくないという理由から、太陽と月は昼と夜に別れて出るようになったというお話があります。

少し話は逸れましたが、保食神というのはそういう五穀豊穡のための幸を与えてくれる神であり、その祈願を込めて祀られていると思われれます。

そして、後者の石碑にありました記録の中に『弁財天社は別称「元雄神神社」といい、庄川の洪水で雄神神社が東側山裾に移転を余儀なくされ』と記述がある通り、この弁財天社が祀られる前に別の神社があった事がうかがい知れます。

それが次にご紹介する『雄神神社（砺波市庄川町庄 4786）』です。



入口の石碑には庄下郷総社 雄神神社と書いてあります。



この神社はかつては庄川の弁財天社が在る位置にあったそうです。

現在は山裾にあります。その理由は2番目の砺波市教育委員会記述の掲示にあった通り、庄川の洪水の際に川の流れが変わり、この本殿と拝殿の間に川の流れが出来てしまったために宝永7年（1710年）に高台である現在の地に遷座されたそうです。

そして、こちらの神社には御祭神として高竈神（たかおかみ）・闇竈神（くらおかみ）が祀られており、瀬織津姫も併せて配祀されているとの事です。

さて、聞きなれない高竈神（たかおかみ）・闇竈神（くらおかみ）という神様ですが、順に説明したいと思います。

2柱（神様の数を数える時の単位は：柱）の神様に共通する竈（おかみ）という漢字ですが、これは古語で『龍』を意味するそうです。

そして高竈神の高は『山の上』、闇竈神の闇は『谷間』を表す言葉とされています。

こうした意味からも五箇山に近いこの地から発する信仰として、山間部に始まる庄川を守る龍神を信仰する神社であると言えます。

配祀されている瀬織津姫ですが、その神社に関係深い神様を祀るとというのが配祀の意味とされています。

これは、元雄神神社に祀られている弁財天に合わせてのものだと思います。

瀬織津姫は地域によっては、弁財天と同一視されており、その流れを受け継いでの雄神神社での配祀かと思われます。

そして、雄神神社を崇拝することにより、

- ・洪水が来ないようにとの願い
- ・農産物や水産物が無事に収穫できるようにという五穀豊穡への願い
- ・庄川水系を元とする地下水への感謝への願い

それら全てが叶えられるようにという願いを汲み取れる、庄川の歴史と信仰を今回知ることが出来ました。

日本海学でも提唱していますが、肥えた森林の恵みが川の流れて魚や水辺に生きる生物の栄養となり、その恵みが海まで届き更に別の生き物への恵みとして波及していくという山から川への自然からの恩恵。

その恩恵を守るためにもこれからも、信仰を続けながら庄川河川を大切にしていければと思います。



庄川中田橋近くにある水神の碑



海側にある射水市新湊にある新湊弁財天

参考文献

Wikipedia <https://ja.wikipedia.org>